

尾道の二つの地域から浮かぶ戦後の風景と、その残し方

横谷, 奈歩

<https://hdl.handle.net/2324/7419068>

出版情報 : Bulletin of the Musashino Art University. 53 (1), pp.133-140, 2023-03-01. Musashino Art University

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



尾道の二つの地域から浮かぶ戦後の風景と、その残し方

横谷 奈歩（非常勤講師／油絵学科油絵専攻、現代美術）

Postwar Cultural Landscapes and Activities from Two Areas of Onomichi and How to Recreate Them

YOKOYA Naho

はじめに

本研究では、『武蔵野美術大学研究紀要 2021-no.52』の拙論のテーマである「埋もれゆく歴史と記憶を掘り起こす」ことに引き続き主眼を置きながら、私自身のアートプロジェクトでおこなったりサーチや作品制作を通して、広島県尾道市の二つの地域における戦後の風景一埋もれつつあるローカルな土地の個人の歴史や記憶の蓄積—をあぶり出すこと、そしてアートプロジェクトとして、それらの風景を未来へ継承する試みについて考察する。

近年の日本において、全国各地で地方におけるアートプロジェクトの数は非常に多くなったが、まず世界のアート状況においても、中央ではない「ローカル（地域）」に注目する流れ・傾向が強くなっているといえるのではないか。それは“中心”とされるものに依存してきた“周縁”なのではなく、今まで注目されずにどちらかといえば埋もれてきたそれぞれの土地の独自の文化の中に、「これからの世界を展望する何か」が、隠されているのではないか。極言すれば、歴史的に地域に生きること自体を見つめ、その多様性を肯定していくといったら、楽観的見方が過ぎるだろうか。

具体的な事例を見ると、2020年に行われた第22回シドニー・ビエンナーレは、オーストラリアの先住民（アボリジニ）のウィラドゥリ語で周縁、端を意味する「NIRIN」をタイトルとし、自身もウィラドゥリにルーツをもつアンドリュー・ブルック（Andrew Brooke）がアーティスティック・ディレクターを務め、世界中の先住民やそれまで周縁とされてきた地域出身のアーティストが参加した。また2022年のドクメンタの芸術監督には、アジアから初のインドネシア、ジャカルタのアートコレクティブ“ルアンルパ”がキュレーターとして選出されているが、作品のテーマや作家にも、インディアンやロマなど世界各地の土地の少数民族、先住民が多く扱われている。筆者は2022年のドクメンタとヴェネツィア・ビエンナーレを鑑賞したが、両者ともにその傾向が見られ、特にドクメンタでは欧米をテーマとする作家や作品が驚くほど少なかった。

た。以上から、それまで美術の中心であった欧米ではなく、周縁とされてきた世界（地域）のマイノリティに注目する流れが来ているのではないか。しかも彼らの視点からすれば、それぞれの土地の独自の文化を自らが扱い、彼らの生きる地域は周縁ではないのである。

前提が長くなったが、上記の考え方にあてはめるならば、私が関わるアートプロジェクトは、いわゆる中心に対する周縁、つまり地方回帰、地域創生や町おこし、特に地方経済を活性化したり過疎化する土地に人を呼ぶことが目的のアートとは一線を画したものである。それぞれの土地に生きる人々の日常に含まれる暮らしや知恵、独自の文化や固有の歴史に光を当て、プロジェクトを通じてさまざまな価値観と多様性の肯定、それらをあらわにし継承する試みが目的ということは、先に触れておきたい。

ここで話を日本国内のアートプロジェクトに戻すと、一概にローカルな地域、中心に対する周縁とされる地方都市とはいっても、それぞれの地域の表情にはそれぞれ大きく差異がある。私は2000年代初頭からアートプロジェクトを国内外の地方都市数カ所で並行して行ってきたが、その中でも長く継続しているのが2013年から広島県尾道市で行なっている「高橋家にまつわる物語」と「星劇団再演プロジェクト」である。本論では、上記の世界的な動きを前提に、二つのプロジェクトの具体的な事例を示していきたい。プロジェクトを行っている地域はどちらも広島県尾道市に位置するが、尾道市内でも対照的な、異なる性質と歴史を持った地域といえる。まず上記のプロジェクトが行われている尾道市長江地区と吉和地区について、その歴史的背景から述べることにする。

1. 対照的な二つのエリアの歴史的な概要と特徴、歴史的背景

1-1. 長江地区（高橋家にまつわる物語）

長江地区は尾道市の東側に位置し、私はある1軒の空き家を舞台に滞在制作「高橋家にまつわる物語」を行なっている。この地区は、尾道でも著名な文人たちが居住して

いた歴史をもち、文化的なエリアとして栄えてきた。たとえば同地区の山城戸通りにある邸宅には、画家森谷南人子が1920年から1981年まで居住し、長江通り北側の高台には画家小林和作が暮らす邸宅があった。1916年から1922年には、長江地区南側で街の中心部となる土堂地区に林美美子が居住していたが、土堂地区は、港沿いに位置し、他地域の港に接する地域同様、漁師の暮らしが入るエリアに該当する。それら港沿いの地域に対し、長江地区は陸側に位置し出雲街道があり、商家が並ぶ、昔からの“セレブ地域”として別格に見られてきた。地域住民によると、かつて長江小学校は尾道の学習院、山城戸は世田谷などに例えられていたという。

1-2. 吉和地区（星劇団再演プロジェクト）

同時にプロジェクトを行なっているもう一つの地域は、尾道市の西側、広島市寄りに位置する吉和地区である。この地区は古くからの漁師町があり、かつては漁師や商人が家船にて船上生活をしてきた歴史を持つ。家船では、子どもたちも貴重な労働力として幼少時から海に出て、何代にも受け継がれてきた漁の知識と技術を身につけ、家族の生業を支えてきた。しかし、『明治国家は「陸」の原理をもって「海」の支配に乗り出してくる。そこでは、「海」への関心は徹底して「陸」の利害に基づいていた。』^(註1)。結果、不就学児童や長期欠席が問題となり、1950年代後半から1960年代にかけて、船上生活を送る家族の子どもたちは、盆と正月以外は家族と離れ、陸（尾道学寮）で生活をしながら学校に通った。のちに家船の人々も陸に上がり、1964年から67年にかけて吉和漁港に建設された「尾道市営正徳浜住宅」（通称漁民アパート）に移り住んだ。この時代の漁民アパートや吉和漁港のありさまは、民俗学者の宮本常一が撮影した写真に残されている。陸に住居を持たない船上生活者たちの歴史を紐解くと、地域が被差別の歴史と共に生きてきたことがわかる。町名というのは、時代や住民や地域の事情によって変化するが、吉和の町名は、元々は「吉和町」という大きな表示の下で、字名（あざめい）が、川西（かわにし）・川東（かわひがし）・正徳（しょうとく）であった。しかし尾道市役所が1966年から順々に住居表示を行い、1966年に「尾道市吉和町正徳」が「尾道市正徳町」へ、1969年に「尾道市吉和町川東」が「尾道市東元町」へと変更され、尾道バイパスから北側の地域では「吉和町」という名称を残すものの、三原市との境に位置する地域は「福地町」と名称を変更され、徐々に吉和の名前が消えていった。

その地区で私が立ち上げたのが、本大学紀要 no.52 でも論じた、終戦後すぐに吉和の女性たちが立ち上げた劇団の再演、「星劇団再演プロジェクト」である。

2. プロジェクトがはじまるまで

2-1. 高橋家との出会い

私が尾道で携わったプロジェクトのプロセスを、まずは「高橋家にまつわる物語」から触れていきたい。このプロジェクトは長江地区の高台にある「高橋家」を舞台に、現在は毎年1回展示公開している。2021年からは、近隣に居住し高橋家と親交が深く尾道の名士でもあった画家、小林和作邸と、同じ尾道市内でかつては“尾道の文化プロデューサー”といわれることもあった産婦人科医の小野鉄之助邸の再生も始まり、高橋家を含めた三軒が同時公開される運びとなり、より戦後の尾道の風景が広く浮かび上がる公開展示となった。

高橋家は終戦後、尾道市の教育長として奉職するために、朝鮮総督府視学官として赴任していた北朝鮮から引き揚げた高橋武氏とその家族が住んだ家である。引き揚げ当初、長江地区内の山城戸通りにある山城戸荘の一面を間借りしていたが、その後上述の小林和作邸に近い高台に家を買求め、昭和25年から居住。同家の次男で脚本家の高橋玄洋氏は、長江の高橋家から尾道市立短大へ通いつつ青年期を送ったが、その後小林和作の勧めで上京し早稲田大学へ、脚本家となったのち現在は所沢に在住している。長江の高橋家は、最後の住人であった玄洋氏の母清子氏が逝去した1987年から空き家となっていた。NPO法人尾道空き家再生プロジェクトやAIR Onomichi^(註2)が活動を開始した時期は、尾道の空き家問題が日本国内の地方と同様に深刻なペースで増え続けていた頃と重なるが、高橋家に関しても今後どのように保存、継承をしていくのが議論と検討がなされていた。2008年、地域の関係者に依頼を受けた尾道空き家再生プロジェクトが片付けと整理に入ったが、その後は2013年に「高橋家にまつわる物語」が始まるまで、しばらくは手つかずのままだった^(註3)。

話は遡るが、私が尾道でプロジェクトを開始する前年、招聘元であるAIR Onomichiから滞在制作の打診を受けた際、展示場所として空き家を使用して制作するという条件があった。その後2013年の夏、私が初めて訪れた尾道で見学したいくつかの空き家物件の中から惹きつけられたのがこの高橋家であり、最初の出会いだった。家の中に積み重なる何層にも埃を被った家具。その奥の凛とした家の空気感。更にその奥にあるたくさんの文献や脚本の類。手紙や絵画、絵の道具やスケッチ、メモもたくさん見つかった。今現在、そこに人の姿は見えなくても、暮らした人々の息遣いが聞こえてくるこの家の佇まいに、私はこの邸宅を舞台に「高橋家にまつわる物語」と題する作品の制作を決めた。制作を開始した最初の2週間は、ただ高橋家を繰り返し掃除し家具を磨いた。それはまるで土砂から遺物を見つけ出す発掘作業にも似ていた。作業がひと段落してから所沢に居住する玄洋氏に手紙を書き、現在の高橋家の

写真とともに送った。

2-2. 星劇団との出会い

「星劇団」との出会いはまったくの偶然だった。「高橋家にまつわる物語」を開始した2013年の暮れ、尾道市立大学の学生から吉和のある女性宅へ、家船の船上生活者の暮らしについて聞き取りの誘いを受けた。私は当時、制作において民俗学の分野にそれほど意識的ではなかったが、この誘いには興味があり喜んで同行した。聞き取りの対象となった川原ヤエ子さんについては、本大学紀要 no.52 でも論じたので詳細は割愛するが、当時89歳のヤエ子さんの語りはとても魅力的だった。彼女の戦中戦後の話、恋や仕事の話、友情や家族、人生の話は教科書には一切書かれていない個人の物語だった。聞き取りの知識も経験も乏しかった私は、初回の聞き取りでテープを回すのも失礼と思い込み、無我夢中で聞き、時には当時の女性たちの生き方に共感し、涙しながら必死にメモしたのを記憶している。その中の星劇団の話が再演プロジェクトへと繋がるきっかけとなった。その後は私一人で何度も吉和の川原家を訪れ、時に温かいコーラ（これはぬるいコーラという意味ではなく電子レンジで温めたもので、冬場は結構いける）をいただきながら、星劇団に関する手記やアルバムから団員の集合写真を見せていただいた。そして帰りには、胡瓜や綺麗な葉書、スカーフや花柄の小箱など、何かしらのお土産を持たせてくれた。

2014年から2016年辺りは星劇団に関する新しい情報がほとんど集まらず、ヤエ子さんの証言を頼りに吉和のフィールドワークを進めた。同時に、尾道市史編さん室や山陽日日新聞、尾道市人権文化センター、尾道市立美術館等を訪問し、星劇団や衆楽座（当時星劇団が公演していた吉和の劇場・昭和35年に火事で焼失）だけでなく当時の情報、特に時代背景と地域の状況に関する調査を広く深く進めていった。調査の際、住民の方に私たちが知っている星劇団の情報を説明すると、「戦後の吉和にそのような文化的な動きがあったとは」という反応にたびたび出会った。当時の星劇団の後見人は吉和小学校の教諭も務めていた地元の郷土史家、財間八郎氏が務めており、尾道市立美術館の学芸員、梅林信二氏の協力を得て、財間氏に関する文献をつぶさに探したが、星劇団に関する記述は見つからなかった。しかしその後、山陽日日新聞記者（当時）の林良司氏が山陽日日新聞の季刊紙内で初めて「青年団と素人演劇会」と題した記事を発見する。また、周防大島文化交流センター内の宮本常一記念館をAIR Onomichi 代表でアーティストの小野環氏と共に訪問し、当時の学芸員、高木泰伸氏にアルバムに残された吉和関係、主に正徳浜住宅（漁民アパート）の写真をさせていただいたりしたのもこの時期であった。

3. 戦後の時代と現代—リサーチと制作過程から見えてくる時代背景

3-1. 高橋家の人々と戦争、そして終戦後までの語り

ここでプロジェクトのリサーチ過程と戦後の時代について触れていきたい。まずは高橋家の人々と第二次世界大戦の関係について触れておかななくてはならない。この家の次男である高橋玄洋氏は、著書『私の昭和 出会った人々』^(註4)にて、先の大戦時に朝鮮に赴任していた父、武氏と共に朝鮮の中学校を転々とした子ども時代の記憶と共に敗戦前後の日々について書いている。1945年3月、佐世保郊外の海軍兵学校針生分校に入校し、「海軍生徒となり国に殉ずる使命に燃え、そのために自分を鍛え上げることに努力を惜しまなかった」日々の中、学業面では軍事に関するものは全くなく、英語のみの授業があったり、厳しい中でも鉄拳制裁的な訓育はなく、部幹事は暴力否定の大佐だったという。また戦況は日々切迫する中で「表面上は勤労奉仕などによる学力の低下を防ぐための開校」とされたが、その真意は敗戦を見込んでの戦後日本再建への布石温存だったのではあるまいかと書く。その後玄洋氏は、「敗戦と共にいの一歩に復員解散させられ」、長崎の海軍兵学校から広島へ帰り、原爆の救護活動から原爆症に遭い、親戚の家をたらい回しにされる。

2022年の7月、93歳になる玄洋氏に、私たちは改めて戦争についてインタビューに伺った。その時玄洋氏は、「先の大戦は、そこまで誰も彼もが日本軍の勝利を信じ込んでいたわけでもなく、軍人を含め人間味があった」と語っている^(註5)。どのエピソードもかつて大文字で語られた戦争の歴史にはなかった私的な物語が、埋もれた個人の記憶の中から漏れ聞こえてくる。

3-2. 高橋家の書架から見つかった文献—新聞連載企画へ

尾道の新聞の歴史は古く、明治中期には既に数々のローカル紙が発刊されていたが、1898（明治31）年に創刊した山陽日日新聞もその一つであった^(註6)。私は高橋家に残されたさまざまな新聞やその中身に向き合うことによって、改めて新聞という形式をプロジェクトに積極的に取り入れることになるのだが、新聞という「媒体、物」に興味を惹かれた理由の一端をここに記述する。

高橋武氏は、広島市の師範学校で英語教師を務め、40歳で旧制広島文理科大学に入り直し学問を修めている。そののち朝鮮総督府視学官の任務を終え、戦後には尾道市の学務課長から助役を務めている。高橋家の書架にはそのような武氏の蔵書となる大量の文献が残されていた。書架には他にも、脚本家北条秀司氏の弟子として修行中だった玄洋氏による様々な社会ニュース、事件に関する記事の切り抜きを貼ったスクラップブックも片隅に挟まっていた。年と日付が明記され、出来事が詳細に掲載されている新聞



写真1: 山陽日日新聞エイプリルフル特別号 (2018年4月1日発行)

は、当時の状況を鮮やかに浮かび上がらせ、こちらの想像力を刺激する。新聞という媒体が、インターネットが普及されていない時代に最速で情報が届けられていたナマモノであり、一般家庭に広く受け入れられ、その反応も含めて活発だった時代が浮かび上がった。新聞のニュース記事は、ある視点からの事実が書かれたいわば当時を伝えるドキュメントであるが、およそ50~60年後に私がたまたま高橋家という空き家に入り、「現在から空白の過去の時間を飛び越えた、ある点としての時間」が描写された新聞記事の中の出来事と遭遇すると、その瞬間、まるでタイムカプセルを開けたかのように時空を飛び越える。新聞という形式が、尾道では現在も日常の中に残っており、いつも尾道の新鮮なネタを探し奔走していた山陽日日新聞こと“サンニチ”の記者とその紙面を尾道のどこかで毎日のように目にした私は、サンニチとコラボレーションが出来ないかと考えていた。一方で記者からは、「高橋家にまつわる物語」の取材の打診を受けていた。私は「高橋家にまつわる物語」が、アートプロジェクトの発表の機会として新聞記事で紹介されるだけでは勿体ないと判断し、紙面上で「高橋家にまつわる物語」の連載企画（不定期連載）が出来ないかと企画書を制作し、当時の社長、秋田完氏に打診することにした。

私が企画書に打ち出した連載企画とは不定期連載の10回シリーズで、現代の紙面に並ぶ記事や広告で構成された紙面に、高橋家で発見されたもの（当時の葉書や手紙、手

ぬぐい等）や、当時の事柄を並置し、説明やアートを匂わせる言葉なしに掲載するものである。紙面に唐突に、当時の高橋家で発見された“遺物”であり“異物”が挿入され混在することで、その日の現代の記事と並び、有無を言わず読者に違和感を突きつける。読者はその違和感から何かを読み取るのではないか。美術の文脈で行なっている活動が社会へ介入する一つの形となりうるのではないか。そして試みは、次の新たなアイデアへとつながっていく。たとえば、山陽日日新聞の記者、林良司氏（現在は尾道新聞記者/尾道市史編さん室）と、肥田伊織氏（尾道市史編さん室）、常に尾道でのプロジェクトを伴走してくれている小野環氏と組んで制作したある年のエイプリルフル特別号では、「記者が年度末の疲れから一斉に休業した設定」とし、路傍の石、尾道の銅像、尾道の老舗有名洋酒喫茶ロダンのカウンターのエイの標本などの視点から、現代の尾道を眺める記事を集めたページを制作した。私たちはこれらの企画で1ページ丸ごと使用した紙面を制作するため、“新聞ジャック”と呼んでいた。ある時は、50年前や100年後の設定で制作した（写真1）。発刊日となる4月1日に、尾道のコンビニエンスストアや飲食店で私たちが制作した新聞記事を見かけるのは不思議な気持ちだった。

これらの制作は前の項目にも示したように、私が高橋家で数十年前の新聞記事を発見したことがきっかけとなって制作したものである。いつか私たちがこの世界に存在しなくなった時、エイプリルフル特別号の紙面を、どこかの家で発見する未来の誰かへのちょっとしたいたずらでもある。未来の世界では、何人の人がこの時空の操作に気づいてくれるだろうか。私と世代が近い山陽日日新聞の秋田社長は連載企画を面白がって快諾してくれたが、実験的な要素も多いこの企画は、新聞という媒体が煮詰まっていた現代において、新しい試みをするタイミングにマッチしたのだろう。

3-3. 高橋武氏の未完の原稿とプロジェクトへの反応

玄洋氏の父、武氏は、1977年に78歳で鬼籍に入っており直接話を聞くことはできない。しかし高橋家で制作していると、この家に残されたものが武氏の代わりに当時の暮らしを雄弁に語ってくれる。2015年のある夏の日、私はこの家の二階の寝室の書架を整理していた。限られた滞在日数の中で大量の蔵書から1冊ずつ埃を払い乾燥させるのは、気の遠くなる作業だった。その日も汗だくで蚊に刺されながら本棚の本や書類を出して作業をしていたが、茶封筒の中から鉛筆による手書きの原稿用紙が見つかり、中身を見て私は声を失った（写真2）。

「常識の果てに」と題が付されたその文章は、日本が終戦を迎える前日、8月14日の午後23時20分に受けた電話のシーンから始まり、人々の葛藤を描いた武氏による未完の原稿だった。

この年は戦後70年となる節目の年であり、直接先の戦争を体験した人々が逝去し、減っている状況であった。私は常に、多角的に戦争のことを知りたかった。知る必要があると思っていた。武氏の原稿を連載企画の一環として山陽日日新聞に掲載したい。その想いを秋田社長に訴え、新聞が夏期休暇に入る直前の2015年8月13日のトップページに掲載されることになった。書き起こしは私が担当し、紹介文は小野環、紙面構成は小野と共に制作し、そしてコラム「山陽余韻」は秋田社長自身が書いてくれた。その文章を引用し、紹介したい。

「▼この夏の掲載がふさわしいだろうと、作者の横谷奈歩さんと尾道市立大学の小野環さんらが、掲載承諾を頂くために急きょ所沢の高橋玄洋先生宅に伺ったのが今週の月曜日のこと。予定稿を尾道からスマホで何度も送られて、相当に忙しく感じて疲れたことと推察します。▼玄洋先生のご尊父・武さんの実体験に基づいた書きかけの小説。構想をまとめた稿まであって、なおかつ途中で執筆が終わっている。なぜ途切れているのか、色々と想像できて物語もあり、掲載して読者の感じたこと色々があっはじめてアートとして成り立つ。▼屁理屈、偏屈、へそまがり。親しい人からそういわれることが多い。物事には賛成と反対があっは当然。ない方が変でおかしい。だからこそ家族であっはコミュニケーションを大切にすることがある。▼その意味では、満場一致、反対意見がないことの方が不自然。誰か物言うことを我慢していないかあるいは・・・」(写真3)。

年一回の高橋家の公開時、訪問される方から「作品はどこに展示されているのか」と質問されることも少なくない。その意味で秋田氏が、高橋家や新聞連載で何やらごそごそやっている私たちの「高橋家にまつわる物語」を、作品として理解してくださっていたことは驚きに値する。

2016年には、なかた美術館での展覧会「小林和作に会う(註7)」の中でラジオドラマの制作を行った。広島の実験ドラマに娯楽性を要求され50代でテレビを引退し、2016年当時87歳となった高橋玄洋氏に、尾道での記憶を元にした脚本を依頼。高橋家に関係した尾道の5人の人物に台詞を演じてもらい、尾道での音の収録、高橋家とゆかりのある新聞地区の洋酒喫茶ロダンのマスター(註8)に選曲を依頼し、完成した26分のラジオドラマ作品は、なかた美術館のほかにFMおのみちで放送された。2016年になかた美術館と高橋家を訪れた美術批評家の小倉正史氏は、「さまざまな人たちの協力を得ながら新聞やラジオなどのメディアも巻き込んだ、言うならば地域的・社会的な広がりのもとに実現したプロセスでした。このプロセスは、作品を通じて社会とつながるという一般の美術のありかたとは、あきらかな違いがあります。さらに言えば、



写真2：高橋家の書架の一部。ここから武氏の未完の原稿が発見された。



写真3：高橋武氏による未完の原稿と山陽日日新聞2015年8月13日号(2015年展示風景)

『高橋家にまつわる物語』はさまざまな人や事柄を包みこみ、なおも広がる可能性をはらんだ未完のドキュメンタリーのようなものであり、美術家の主導するプロジェクトとしては類を見ない出色のものだったと思います。」と、当プロジェクトにおける美術作品の概念に対する新たな捉え方に着目している(註9)。

3-4. 星劇団：聞き取りの具体例と当時の写真発見

ここで吉和の星劇団の話に戻す。星劇団は、終戦直後の1946年から約10年間、当時十代から二十代の女性たちが立ち上げた劇団である。地区内にあった尾道商業高校は進駐軍の駐屯地となっており、終戦直後の物資不足の中、校庭に捨てられた空き缶に描かれた星形を切り取って舞台の装飾に使ったことから、劇団名が「星劇団」となり人気を博した。戦後の余裕のない時代に、吉和の人々の間でそのような動きがあった事実が、驚きと共に次々に明らかになっていく。しかし現代でも、昭和50年生まれの人とほぼ同世代の尾道出身者は子ども時代から「西の吉和、東の久保」といわれた記憶が残り、吉和地域に近づくのを制止され、吉和からの帰りが夜遅くならないようにと親に注意されたとの証言がある。

実際に地域で過ごす時間と、周囲の見られ方や根強い偏見、取り巻く環境とのギャップを肌で感じる中、私は、地



写真4：当時の星劇団プロマイド写真（故石田光正氏所蔵）

域の方との対話や歴史的事項のアドバイザーである尾道市史編さん室のメンバーから、たびたび地域と時代的背景を俯瞰するアドバイスももらい、客観的な歴史の流れや自身の見方を失わないように心がけた。

2013年冬から長い時間をかけて劇団の再演を目指し、リサーチとフィールドワークの機会を重ねた私たちは、吉和在住者の山根基嗣氏、出身者の砂田信行氏の協力を得て、回覧板やポスターでの周知、星劇団や当時吉和に存在した衆楽座についての情報を募った。座談会や研究会を開催しながら徐々に当時の星劇団の情報が集まってきたが、同時に逝去される方も多く常に時間との戦いであった。そのような状況下、当時を鮮やかに映し出す写真が見つかった。それらの写真は、星劇団の世話係をしながら自らもタップダンスで出演した故石田光正氏や、父が協力していたという山根基嗣氏の自宅からも発見された星劇団のプロマイドだった（写真4）。本大学紀要 no.52 の拙論 1-5 の項でも少々触れたが、個人の記憶というのは他者や外部目線にさらされ、刺激を受けなければ、埋もれたままになってしまう可能性が高いと改めて気づいた。

2020年はコロナ禍で延期が話し合われる中、この写真の発見は私たちの希望となった。未曾有の災禍により集合して練習や打ち合わせも出来ず、私たちは発見された写真と同じ場所を割り出し、衣装を着て撮影する“トレース作業”を再演の一つの形、いうならばプレ再演とし、とにかく前へと進もうとした。再演は図らずもコロナ禍という戦時下を連想させるような張り詰めた空気の中で行われた（写真5）。戦中の個人の証言が貴重であるように、記録冊子に残された、コロナ禍に生きた私たちの小さな声も、いつか未来に必要な声となるのかもしれない^(註10)。

3-5. 星劇団：プロマイドから実際の再演まで

星劇団の再演は、コロナ禍において会場決定や練習が出来ないことに悩まされる日々が続いた。それまでのプランは、戦前から昭和35年まで吉和地区にあった衆楽座と同等の劇場を吉和小学校校庭に再現するもので、足場を組む

専門の会社も決まっていたが、コロナによる教育施設内の出入り制限もあり、なかなか会場が決まらずにいた。しかし再演が開催された2022年3月の前月、思いがけず“最高の場所”での開催が決定した。私たちが初期のフィールドワークの際、再演の舞台として目をつけていたのが、吉和漁港の漁民アパート跡や周辺の旧冷凍倉庫跡であった。そこは普段から地元の漁師たちが暖をとりながら集まる場所になっており、置かれた古い椅子やカレンダー、焚き火の風景が、既に劇場を彷彿とさせるとても味のある空間となっていた。交渉の末、設営と搬出含めた三日間、旧冷凍倉庫跡という歴史的建造物を今回の再演の舞台として貸していただくことが可能となったのである。

そして一般公開はせず、関係者のみの記録映像の撮影という形を選択した。出演者やスタッフは、幅広い世代で総勢40～50名にも上り、ここでの掲載は割愛するが、記録がメインの再演となるため、会場設営の監督と記録関係はベテランで技術のあるチームで固めた^(註11)。また、舞台制作のアドバイザーと特別出演としてパフォーマーでダムタイプ所属の、砂山典子氏を招聘し、吉和の子どもたちに向けたワークショップと全体のプログラムの監修担当を依頼した。

演目は、実際の星劇団の出演者からの聞き取りを元に構成した。戦後の星劇団は、大阪松竹歌劇団養成学校に在籍していた浜中初恵さんが、空襲がひどくなり吉和に戻り、終戦直後に若い吉和の女性たちを集めたことから始まった。初演は1946年4月21日に行われたが、養成学校でプロとしての教育を受けてきた団長の初恵さん以外の出演者は、舞台未経験のメンバーがほとんどであった。私たちは星劇団が行った演目やスタイルをできるだけ忠実に再現しながら、その解釈は現代に生きる私たちの身体を通してアレンジしながら現在へとつないだ。また、当時の劇団員と対話をする形で、少女時代の姉の死を受け止めるヤエ子さんの録音音声や、後藤梅子さんの聞き取りの中にあつた壮絶な人生の語りを再演に追加した。それは星劇団の存在に対するリアリティの面だけではなく、彼女たちの人生へのリスペクトであり、星劇団の存在をそっと共有し、受け渡してくれた彼女たちへの大きな感謝からである。彼女たちと実際に出会わなければ、星劇団とは出会えず再演も制作できなかった。私たちの歴史が少しでも重なった奇跡に感謝した。彼女たちは既にこの世には存在しないが、その言葉も精神も、私たちの身体を通じて生き続けることを、再演しながら心の中で誓った（写真6）。

また、未来の子どもたちへの継承のかたちとして、吉和小学校に通う子どもたちへのワークショップに砂山典子氏を講師として迎えた。演目のひとつ「吉和ブギウギ^(註12)」と、第一部のチンドン屋、そして吉和ベッチャー^(註13)のシーンにも出演してもらった。吉和の子どもたちや保護者と世界的なパフォーマーとの出会いは当初私が予想していた“化学反応”を上回り、大成功だった。



写真5：当時の星劇団と現代のプロジェクトメンバーが写真上で共演したプロマイド写真。再演の予告として、尾道新聞の2021年元旦の号に掲載された。



写真6：2022年3月21日の星劇団再演の場面。亡くなった元団員の録音された音声との台詞劇。このシーンを私たちは親しみを込めて“降霊術”と呼んだ。

再演メンバーは皆、自分ごととしてこのプロジェクトをとらえ、常に現場では活発な意見交換がなされ、それぞれが「わたしの」星劇団を作ること真剣だった。本プロジェクトのリーダーであり、作家である私はそれでいいと思った。おそらく当時の星劇団もそうだったのであろう。コロナ禍や漁港での再演は難易度が高く、実現不可能と思われる中で、地域の協力者のみなさんも必死に奔走してくださり、再演にこぎつけることができたのは奇跡といっても過言ではない。それはまさに、初恵さんやヤエ子さんを中心としながら出演者も協力者も皆が輝いていた星劇団の再演だった（写真7）。現在は記録の冊子制作と上映会を予定しており、この夜の「事件」は未来へと残されていく。

まとめ 歴史の再演と再創造から、個人の歴史や物語の継承

本稿では尾道の異なる地域におけるプロジェクトについて論じた。二つのプロジェクトは、地域的背景による特色や内容の違いはあるが、一貫して、ある固有のローカルな

土地における過去の出来事の再演、再構築、再創造である。そこにはさまざまな地域の背景—その環境や時代、その土地に生きる人々のリサーチと同時に、想像し、共に歩みながら一度身体に取り入れ対話できるかが、最も重要なのである。高橋家のプロジェクトでは、家の中に込められた物語を想像力で組み直し、聞き取りや往復書簡から集めた情報を基に、ある戦後の一家族の物語の再構築、再創造を試みた。星劇団再演プロジェクトでは、奇しくもコロナ禍での緊張感が戦時下を連想させ、プロジェクトの本題である「戦争体験者ではない私たちが、いかに彼女たちの経験を身体にトレースできるか。自身の体験として想像し、再演につなげられるか」に対する絶大なりアリティをもたらず結果となった。

それぞれのプロジェクトにおける再演、再構築という行為は、過去と現在をつなぐ儀式的な再創造のプロセスである。それは“ソーシャリー・エンゲイジド・アート”のような社会の問題解決の試みとは異なり、私のプロジェクトが目指すのは、「各地に埋まったタネ」のようなものを見つけ、さまざまな形で表現することである。ここでいう“タネ”とは、時代と共に地域に生きること自体を見つめ、多様性を肯定し、可能性を見出すための契機である。未来の私たちが生きていく上でのヒントを与えてくれるものでもある。そして地域固有の歴史やそれぞれの土地に生きる個人の物語は、つなぎ手となるアーティストの手によって表現へと昇華し、再構築しながら未来へと時をつなぐ。しかしその先の未来を作るのは、アーティストではなくその地域の人々なのである。

註・引用文献

- 1 (引用文献) 井上浴「海に生きる、海に育つ」(尾道学寮物語刊行委員会編『尾道学寮物語：尾道・吉和漁港家船のこどもたちの記録』、家族社、1998年、p48)
- 2 AIR Onomichi は、広島県尾道市で活動を行なっているアーティスト・イン・レジデンス(芸術制作を行う人物を一定期間招聘し、その土地における滞在制作の支援を行う事業)である。2007年より2021年まで17組の国内外のアーティストを招聘し、空き家問題が慢性化している尾道市旧市街斜面地を舞台に創作活動を展開してきた。AIR Onomichiの特徴は、招聘作家の選定や場とのマッチング、地域コミュニティとの関係性の構築など、在住アーティストがディレクションとコーディネートを行っていること、招聘アーティストの中長期的なプロジェクトを支援していることにある。招聘作家は、地域固有の場所の特性や来歴と対峙しながら、リサーチやワークショップ、制作、発表等を行っていく。
- 3 「高橋家にまつわる物語」では、「AIR Onomichi Docu-



写真7：第一部の劇中で、劇団名を「星劇団」と決めた時の場面（撮影：三上清仁）

ment」として2013-2016年を取録（2017年3月発行）と、2019年の大改修を中心としたプロジェクト全体を取録（2020年11月発行）を2冊の記録冊子にまとめている。うち後者のp.44-47には、高橋玄洋氏が生誕した1929年から現在までの年表があり、制作活動を含めた高橋家の歴史が網羅されている。また、2013年までの高橋家に関しては、NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト代表理事の豊田雅子氏による「風待ちの家～高橋家によせて～」(p.38) に詳しい。

- 4 (参考文献) 高橋玄洋『私の昭和 出会った人々』、ユー企画印刷、2009年
- 5 2022年7月11日、所沢の高橋玄洋邸において3時間にわたる高橋玄洋氏へのインタビューおよび映像収録を行った。内容は主に戦中戦後についてだったが、93歳になる玄洋氏の記憶は細部に至り、脚本家時代の文学者との交流など多岐にわたった。
- 6 山陽日日新聞はタブロイド判4ページの夕刊紙で1898年創刊、2018年廃刊となった（戦時中は休刊）。日祝日を除き毎日発行され、合併前の旧尾道市域を中心に約3000部が宅配されていた。廃刊後、尾道新聞が発刊されるが創刊時の記事にはこのように書かれている。「尾道の新聞の歴史は古く、尾道の第三期黄金時代、すなわち、鉄道が開通したり、商業会議所が開設されたり、市制が敷かれたりした明治中期に、「山陽日報」、「西備（せいび）新聞」など、数々のローカル紙が産声を上げています。（中略）昭和50年代には「山陽日日新聞」、「三都新聞」、「瀬戸内海タイムズ」、「大朝（だいちょう）日日新聞」と日刊紙が4紙もあり、全国の地方都市で日刊紙が4紙もあったのは尾道市だけで、これは世界的にも見られないことでした。」[2019年2月「尾道新聞」創刊へ]（「尾道新聞」2018年12月25日記事より引用）
- 7 2016年10月8日から2017年2月19日、尾道のなかた美術館で行われたグループ展「小林和作に会う」。須田国太郎や中川一政、梅原龍三郎など、小林和作と関係のあった尾道ゆかりの作家8名で構成された展覧会。参加作家には、高橋玄洋氏も含まれており、私も「高橋家にまつわる物語」のインスタレーションを展示した。
- 8 洋酒喫茶ロダンは、尾道市久保、新開地区にある老舗の

洋酒喫茶である。新開は、古くは尾道の港に立ち寄る船員たちで栄えていた繁華街である。90歳近くになるマスターとマダムは今でも日曜以外は店のカウンターに立ち、尾道の生き字引を地でいく存在である。マスターである石川武氏自らが収集した貝と蓄音機コレクションによる内装は、まるで博物館であり、驚異の部屋である。膨大なレコードのコレクションからラジオドラマのために、高橋家にまつわる曲を選曲、星劇団のタップダンスの曲も、マスターに選曲を依頼した。

- 9 「小倉正史の現代美術講座 その46」『月刊ギャラリー』2017年2月号、ギャラリーステーション、p.66。
『小倉正史著作選集』編集委員会編『アートはどこへ行く？ 小倉正史著作選集』、水声社、2022年、pp.233-234。

- 10 これまで発行した星劇団の記録冊子は3冊にわたり、初期のリサーチ、コロナ禍のなかで星劇団をテーマに書いたプロジェクトメンバーによる文集、プロマイド写真集と再演までの年表にそれぞれ分かれ、記録されている。プロマイド撮影の記録については、当時のNHK 広島ディレクター、高橋弦氏の取材で5分のドキュメンタリー番組にまとめられ、広島県と中国地方の番組内で放映された。ディレクターは吉和のフィールドワークにも同行しながら時間をかけて取材し、番組にした。私は吉和の方々と共に、星劇団のことを次世代へさまざまな形で共有していく方法を探っていた。
- 11 再演は、一般公開せず記録がメインの形としたため、舞台制作と記録チームは経験豊富な専門家に依頼した。会場写真撮影：三上清仁（アーティスト）、映像撮影：黒田教裕（映像作家）、舞台設営監督：杉井隼人（アーティスト）、音響：永井真介（ミュージシャン）が担当した。キャストは演劇経験者や学校等で演劇部経験がある者、全く経験のない者等、オリジナルの星劇団に即して幅広いメンバーによって構成された。全スタッフ名は、現在準備中の2023年出版予定の再演プロジェクト記録本に詳しく掲載予定である。
- 12 星劇団の再演は、第1部が星劇団の成り立ち、第2部はレビューで構成され、第1部の脚本と時代考証は、肥田伊織、林良司（尾道市史編さん室）が担当した。第2部の冒頭は「吉和ブギウギ」（東京ブギウギのアレンジ）であったが、吉和弁や吉和固有の風景や風習を織り交ぜた歌詞は、主役の初恵を演じた吉和出身の塚本明日香が制作した。
- 13 吉和ベッチャーは吉和に根付いたお祭りでも、お多福と猿田彦がささら竹で道ゆく人の頭や肩を叩いていく。有名な尾道ベッチャー祭は尾道市民俗文化財に指定された奇祭で、毎年11月3日には「ベタ」「ショーキ」「ソバ」の面を付けた氏子たちと獅子が神輿とともに市の中心街を練り歩き、子どもを見つけると追い回して手にした「ささら」や「祝棒」で勢いよく頭を叩いたり体を突いたりするが、吉和ベッチャーでは何となく申し訳なさそうに叩いてくれる、親しみやすい地域の祭りである。